

筑前國續風土記 卷之六目錄

那珂郡下

四箇畑	不入道	埋鐘	鯪淵	馬瀨	梶原	山田	一乃堰手	伏見神社	迹驚固	裂田溝	安德	後野	南面里	戸坂越	岩戸河内	院使寺	火亂社	春日神社	春日原	小倉	辰藤	若久	屋形原	伊牟田原	上警固神社	山王權現社	午時講	那珂村	泉村大塘	潮煮塚	東光寺	劔塚	大鋸谷	大休野間塘	那珂川	高宮岩屋興宗寺	百塚	警固村	藥院	庄村	村
-----	-----	----	----	----	----	----	------	------	-----	-----	----	----	-----	-----	------	-----	-----	------	-----	----	----	----	-----	------	-------	-------	-----	-----	------	-----	-----	----	-----	-------	-----	---------	----	-----	----	----	---

鳴

瀧

一

瀬

五

箇

山

九

千

部

山

畑

彌

長

席田郡

一所

金

隈

筑前國續風土記 卷之六

貝原篤信選定

貝原好古編錄

竹田定直校正

那珂郡下

○警固村

警固大明神小鳥大明神の事は
已に福岡の部に載之。

いにしへ警固所こゝにありし故、其村に名付しにや、
もしくは警固大明神鎮座の地なる故、村の名とせしに
や。此社を今の藥院の地にうつせし事、已に福岡警
固社の所に載たり。今此村には別に産靈うぶすなの社なし。

福岡の城も、本丸より東は警固村の境内なり。警固
村の上に丸山と云あり、此山のまはりに經一尺わたりばか
りの壺其數二三百埋めり、つらなりてめぐれり、其
壺は皆藥をかけずして素焼すやきにせる也、内には土あり、
いつの時又いかなる故にうづめしと云事をしらす。

常陸國志に曰、寛文二年の秋常陸國平磯村の人、古

塚をあばきて石棺を得たり。棺の内に甲冑太刀など種々の器有。塚の廻り百間許が間皆陶器を埋めり、宅の廻に垣をしたる跡の如しと云、是又同じ類也。

○藥院村

此村むかしは今の藥院町にあり、福岡の城を築給ひし後、彼地に町を立られし時、今の所にうつる。むかし異國より博多に船の著し時、藥草多く渡しを、此所に藥圃をかまへてうるし所なる故、藥院といふよし里人いへり。藥院村の上の山を古賀山と云。此村の前むかしは潮入し斥地がたなりし故、鹽屋の跡多し、高き畠にあり。此村の社ある山より寛永年中瓶からをほり出せり。其内に朱多く入てみてり。かゝる事は所所に往々ある事なり。むかし朱を以てたからとせし故なるべし。一説に村老の曰、むかしの藥院村は今の香正寺のあたりに有。今の藥院町筋は、むかし他方へ通行の大道筋なりしかば、馬市を立んとて、藥院村の民家を藥院町に移せり。福岡の城を築給ひし

時、今の藥院に士宅さむらいやしき又は商家まぢやを立んために、警固村の南の方に藥院村をうつさる。今の藥院村是なり。別に此邊、此村の立所なくてここに移されし故、農人の宅皆せばし。小鳥の神社はいにしへより藥院村の産靈うぶすななり。むかしの社は今の藥院下屋敷町の南の川からとのあるあたりにあり。其時の神前の御地なりとて、今埋殘して少なる地今にあり。其田地の名を泉水田せんすゐでんといふ。福岡の城を築給ひし時、山上に在し警固明神の社を、今の警固村の山上中比長圓寺有し所に移す。藥院村立なをりし時に、小鳥の神體をも今の警固村の山上警固の社の相殿にしばらく移す。土民の説に、小鳥明神は警固明神の御母にてましますといひ傳へし故なりとかや。其後藥院村は今の山下に移り、警固明神は今の藥院に移し給ふ。然るに藥院村農人等おもへらく、他村の内に我村の産靈を置奉るべきに非ずとて、今の藥院村の山上の地に移せり。小鳥明神の本社是也。今警固明神の相殿に祭

れる小鳥の神は、中頃今の警固村の上の假殿に警固明神とし暫く一社に祭りし故、元來御邸子なる故、警固明神の相殿に勸請せしなるべし。彼地の本社は警固明神なる故、鳥居の額にも警固大明神と書り。

○庄 村

此村もむかしは今の橋口四十川天神の社邊にありて庄の濱と言、長政公福岡の城を築き給ひし時、今の地に移る。然れども猶橋口の天神を以て産神とす。

○那 珂 川

日本紀にはなか灘河と書り。此川は其源早良郡背振山の麓、又此郡五箇山の奥大野より流出、那珂郡中を流れて博多の西福岡の東に至て、道程六里をへて海に入。川の徑ワタリ廿間或卅間許所によりて廣狹異なり。又四十川は屋形原若久村より流出、平尾を過て下に至て、昔の庄村の境内にて那珂川と一になる小流也。

○高宮岩屋 興宗寺 曹洞宗

高宮村の西南十町山の半腹にあり、窟の口南に向ふ。

内に三の間あり、廣さ各方一丈、高さ口六尺、中と奥と共に一丈、深さ凡三丈二尺五寸、奥の正面大盤石に佛像を刻めり。中位は彌陀左右に觀音勢至あり。其たくみ奇古にして、凡工の及ばざる處なり。國中石窟多しといへども、如此大なるはなし、民俗は穴觀音と云。先公忠之此觀音に祈り給ふ事あり、效驗かうけんの御賽かへりまうしに、窟いはやの前に拜屋一字を創立さうりふし給ふ。其後沒倒しけるを、元祿六年長圓寺の住持湛堂たんどう和尚窟を修補し、拜屋を再造し、其下に高く石階を築き、階下に一寺を建て、補陀山興宗寺とす。此地むかしに替り、莊嚴新にして佳境となる。拜屋の内石階の上より、むかひを望めば、南山高くつらなりて、景すぐれてうるはし。參詣の人、遊觀の客多し。民家遠く俗塵をはなれたる閑寂かんせきの地なり。上の山を寺塚といふ。興宗寺はもと遠賀郡熊手村にありて、同郡高倉邑龍昌寺に屬す。近世廢絶せしを、湛堂和尚龍昌寺の周道に寺號を乞得て、此地に再興す。

○百塚

岩屋觀音の西北の高さ所にあり。平尾村の境内なり。是又内に穴ありて、皆南に向へり。其間廿間、あるひは遠近有て、南より北の方に相つらなれり。其數多き故に、百塚と號するならん。むかし福岡の城を築き給ひし時、此塚をこぼちて、其石をとりし所はくづれて、穴なきも多し。又平尾山にむかしは石の窟多かりしが、是又福岡城の石垣を築し時、其石多く取用ひし故、窟くづれたりといふ。又平尾村の中に、一本樹キとて大なるたぶの木あり、菅公左遷の時休み給ふ所といひ傳へたり。

○大鋸谷

福岡城の南山間にあり。長政公人國の後、大鋸をひく匠みを置給ふ、故に名づく。其後其東南の谷に人家多く出來て、町をなせり。其所をも新大鋸の谷と云。むかし大鋸谷と名付し谷にも人家ありて、古大鋸谷と稱す。谷の名おの／＼かわれり。頗民家つ

らなり、しげし。又此西の方、山谷の間、近年所々に民家多く出来たり。

○大 休 附鬼火

大鋸谷より西の方赤坂山、茶園谷、馬屋谷の上高き所に、大休とて樵夫の坂を越え、になひもの擔物をおろしてむらがり休む所あり。是より東西北三方を眺望するに眼界廣く、山水の景甚うるはし。前にしるせし荒津山の風景にひとし。天下に名高き須磨、明石、和歌浦、天橋立、嚴島、諸所の佳景といへども、おそろくは是に過べからず。又此邊六本松といふ所あり。夏冬にかぎらず、夜々飛火あり、或は高く、或はひきく定る所なし。人近づく時は飛去て見えす。殊に雨夜に出る事多し、かならずしも毎夜見ゆるにはあらず。是古昔よりある火にて、福岡邊の者は常に見なれし事なる故、あやしとせず。此所のみにかぎらず、國中處々に、かうやうの火飛處多し。他國にも此類多し。筑後國高良山のひとつ一火、河内國松原の一火など

も、此類ならし。此郡の比叡村の火も、又是に似たり。因ておもふ、宋の時、廬山に光あり、當時の人民其下にたからあらんとおもへり。開善兩山の間亦光氣あり、地より發し高く上りて下る。是其山にもと銅坑ありしを以てなり。邵武の張鑄といふ者、岳陽に官たり、江上に光氣あるを見る。其後漁人其所におゐて、一の銅鐘を網し得たり。先儒の云、石灰穴中火を遺す時は、則連蔓として火絶ざる事數百千年、山中時に火光有といへり。地境圖に云、黄金の氣夜火光あり、又兵屍及牛馬の血能燐をなすといへり。明の李東壁が曰、野外之鬼燐其火の色青し、其かたち炬の如く、或はあつまり、或は散ず、俗に鬼火といふ。或云、諸血の燐光也と、又閱古隨筆に曰、火の恠を曰遊光。と案るに、此火は遊光なれば、火の恠なるべし。此等の説によりて是をおもふに、此山にもと銅坑灰穴のありしにや。又八幡の記等に、文永弘安の時、蒙古人來り赤坂大饒谷の北にあり、那珂郡の内なり。邊にて合戰

し、多人數討死せし事あり。此時のみにかぎらず、其前後にも此邊にて戦鬪の事有しも、いまだしるべからず。此村の境内に、かぶと塚矢盡などと云所あり。是もいにしへの戦場なりしと云。然れば兵死の血の燐と成りたるにても有ぬべし。いぶかし。

○野間塘

野間村より西の方若久村に行く道にあり。頗大なり。穴観音の數町東にあり。

○潮養塚

鹽原の境内にして、三宅村の北にあり。いにしへは此邊まで潮來り鹽を焼し所あるゆへ、潮養塚と名付くと云。鹽原と云も、是に依ての名なりと云。又此邊にも暗夜には折々飛火あり。遠く見れば其大さ大續松ほどあり。近づけばほそく色青くなる。其飛ぶ事高さ二三間許、時によりて遅速あり。早き時は矢の如し。養島、鹽原、住吉、比惠、高宮、野間、此數村の間を飛廻り、人近づけばたちまち消て、又遠く見ゆ。

或は二三にわかれて飛事あり。

○東 光 寺

此所むかし來光寺と云寺ありし故、村の名とす。本
は那珂村の内なり、後に分れたり。此村の産神は吉き
備津宮ひつみやなり。此社のあるほとりを東光寺といへば、
此所則其遺址なるべし。又此村に大日寺有。本尊大
日なり。これを中の大日と云、凡民俗痘疹に疫鬼あ
りと云ならはし、疱瘡の神と稱す。然るに此佛能く
疱瘡の疫鬼をはらふとて信仰し、小兒を携へ負て參
詣する者多し、群ぐんをなせり。鬼神論と云書にも、痘
瘡の神の事を能く辨せり。民俗言傳ふるは、此大日
を中の大日と云ふ事、一もとの木を以て大日の像を
三作りしに、其もと木にて作りたるは宗像郡本木の
大日也。木の末にて作りたるは糟屋郡須惠村にあり。
其木の中にて作れるは則此村の大日なり。此故に本
中末いづれも村の名とすと言。今案るに、東光寺は
則那珂村なりし故、所の名を以て、那珂の大日と言

ならし。凡民俗の云傳へは、似たるを以て取合せたるひが事多し。かうやうのひが事を民俗の言出せる事めづらしからず。すべて信じがたし。此大日堂寛文の始までは、今の堂の東に在。其後今の地にうつせり。此所は吉備津明神本主なり。大日堂は其地を借り。地主にはあらず。

○劍塚

東光寺村の田の中に有。此塚の上横廿間許長三十間許あり。其所城のごとく廻りに堀あり。むかし亂世の時小身の士の要害とせし所なるべし。いか成故に劍塚と云にや、詳ならず。石窟あり、入る事深さ二間二尺許横七尺餘、入口横三尺許、高七尺あり、いさぎよき岩屋なり。口は南に向へり。是又上古の家なき時の民居なるべし。

○午時講村

近代誤て五十川と書、むかしは午時講とかけり。かかる事にて其故實をうしなへる事多し。古の名によ

りて見れば、昔此所にて午時に佛經を講せしにや。

○那珂村

那珂は和名抄に、當郡の郷の名とす。今は一村の名とす。始に東光寺村竹下村すべて那珂村の内也。後分れて三村となれり。凡郷の名村の名を以て其郡の名とせし例、諸國に多し。郡の名を以て國の名とせし所もあり。

○白水村大塘つゝみ

上白水村にあり。塘の中廣く岐また多し。岐のおく長し。昔は此塘の下に大池とて此塘ほとなる大塘あり。今は田となれり。其の田四町あり。此塘は初は小塘なりしを、旱魃かんぱつに備へんため、寛文の始土手を高くして大塘とせり。水面はるかにして目も及ばぬほどの大塘なり。塘の土堤の根はり三十六間、水の深さ數間あり。國中にては此塘と宗像郡勝浦かつうらの塘、鞍手郡植木の池、怡土郡井原の塘などすぐれたる大塘なり。又宗像郡千鳥池、粕屋郡鹿府しゅうぶの池も大池なり。

○伊牟田原

上曰佐村^{をさ}の境内に長さ十二三町の廣き高原あり。下白水、彌長、止曰佐三村に近し、下白水村の北にあり。

○上警固神社

上警固村にあり、今藥院にまします下警固の神と同神なりと云。九月十五日祭禮有。是より下警固まで二里ばかり有。上警固、彌長、東郷^{とうがう}、此三村は一村の如く北より南につらなれり。上警固は北に有、彌長は中にあり、東郷は南にあり、彌長の神は背振の神なり。

○山王權現社

比叡村にあり。比叡山の山王を勸請せし故に、村の名も比叡と名づく。社は村の南に松林の高き岡に有。此村に六甲島とて、三町許の瓜圃あり。瓜を植ふるによろしと云。又此村にむかしより鬼火有て夜見ゆ。此村より出て四方一里餘飛廻る。四時時々見ゆ。遠く見れば、其大さ續松の火の如し、近付ば、らうそく

の火のごとし、其色青白なり。或は二となり三となり、ならびとぶ。いと近くよりてみれば水精の如くにして、火にはあらず。

○なま戻 藤

麥野村の境内、宰府往還の道の邊に在。藤花長くして、尋常の藤とかはれり。其古樹は寛永の末の年かれけるを、實をうる傳へて今にあり。其側に常の藤をもうる置けり。古の藤は極て大にして、松樹にかゝりねぢまとへる故、往來の人呼てねぢ藤と云しより、おのづから所の名となり、今にねぢふちと云なり。

○若 久 村

村より南に住吉明神の社あり、其南の原上に廣平の地あり。是古昔、神功皇后異國より歸らせ給ひし時、此所に住吉の神社を立させ給はんとし給ひし所也とかや。一説には、百年許前に、所の富民住吉の社を立んとて、此地をならしたりともいふ。此村の境内

に近年國君の苑あり。果木等多し。

○屋形原

むかし此所に千葉探題の居宅有し故、屋形原と云。
其宅の跡あり。四方に堀有て、頗要害をなせり。田
中に棟樹一本あり、其邊の田の字を關屋と云。是は
むかし大友氏其旗下に屬せし所を巡見せられしに、
早良郡檜原村大平寺にしばらく逗留ありし時、關を
すえたる址なりとかや。今もめぐりに土堤殘れり。
此村の南に、箱の池とて大なる池あり。水つゝみな
り淺し。凡此町及若久の谷は源頭なき故、旱損の患
あり。屋形原の上なる檜原村には、後の山より谷川
ながれ出れども、樋井の郷に流出て、此方には來ら
ず。谷の勢は屋形原の方に谷川來るべきやうにみえ
て、地たかき故、此方にはながれず。

○春日神社

春日村にあり、村の名も此神社あるによりて名づけ
たり。社は林の中にありて境内廣し、社前に池あり。

林木しげく殊に喬木あり。大なる藤多し。晚春花盛にひらく時 遊觀するに堪たり。宮所物ふりて、村邑にありては大社なり。古は神領も多かりしと云。今も田の字に^{あまな}桑田^{しとぎ}、器田、御供田などゝて、社領の名残りたる所十町許あり。其御供田を作るもの今も一段より七升充の米を公税の外に出して、九月九日の祭、に斗米の御饌^{みけ}五膳升米の膳廿五神前に備ふ。

○春日原

春日村にあり、下は麥野村の内に入たる所あり。東西十二町、南北十二町許有て平原也。其平なる所^{はら}枿の面のごとくにして廣遠也。其地黒土にて性あじき故に、五穀によろしからず、故田圃まれなり。雜餉の隈の北より此原を通りて、藥院へ行徑路あり、近し。中道といふ。國中の廣野を稱するに、第一安野、第二怡土郡井原西の曾根原、第三は此春日原なるべし。

○小倉村

此村の高き丘の上に大なる墓三十六あり。所々に散

在す。是をあばけば其内は古墓なり。骸骨あり。何れの時人を葬りしにやしれず。

○岩戸河内

片繩村より上安徳村に至て、凡十二村あり。仲村、五郎丸、松木、今光みつ、道善だうぜん、後野うしろ、東隈、西隈、安徳、中原、梶原、片繩なり。此十二村ともに仲村の現人あらひと大明神を以て産神とす。凡河内と云は、一谷の内に數村つらなれるを、すべて何某がしの河内と云也。

○院使寺

別所村の枝村なり。今は訛りて井尻といふ。相傳へて云、元明天皇の御宇、和銅二年より背振山に住せし名めいし縹めいし湛譽上人院宣有て召るゝ事あり。是は太子の御なやみ加持のためとぞ聞えし。かくて湛譽は詔みことのりに應じて、帝てい闕けつに至りける。其時院使の至りし寺なればとて、院使寺と號すとなん。宴曲抄に出たり。今は寺はなく成たれど、其跡に觀音堂殘れり。其側に湛譽上人が木像あり。

○火 亂 社

別所村の枝村松尾と云所にあり。文明の比、此所に火
亂と云山伏あり。劍術の上手にて、且幻法げんぽうを能行ふ。
天性凶惡にて様々あやしき事どもを行ひし故、所司
是を聞て、人の妨になるべき者なりとて、斬罪ざんざいを行
ふべきよし云けれども、火亂其旨を心得て討れず。
かれが劍術の弟子に式部と云者あり。是は早良郡田
島村の者也。所司是を招て火亂をうたせける。式部
とかくしてまづ火亂が右の腕をうちおとす。火亂い
かりて、公命とは言ながら師を殺すの罪のかるべか
らずとて、首をうたれける。其後果して式部が親兄
弟さまへ災難有て亡ける。式部是におそれて此所
に社を建立し、又火亂大明神といはひぬ。十月丑日
祭あり。又此松尾の東におむかへといふ田の字あり。
安徳天皇岩戸の少卿大藏種直のもとに行幸の時、御
迎に出し所なりと云。

○後 野 村

此村に圓通寺と云古寺の址あり。大寺なりしにや。
いにしへ領主より寺産を付られし文書村民の家にあ
り。其所に周一丈六尺ありし大楠有しを、貞享二年
の比營作の材用にせんとて切ける。其根をほりしに
下に石あり。是をほりて見けるに、其下に又石あり。
石灰埴土にて是をつめ、其下に石棺あり。其中に人の
骸骨あり。内を朱にてつめたり。朱變じて紫色となれ
り。其朱四斗許有し也。石棺の内長六尺横一尺二寸
あり。石の面に文字もなければいかなる人を葬しに
や、知がたし。もろこしの葬に、誌石しせきに名をしるし
て埋むは、良法なるかな。其側に石の小棺六あり。
是其從者の墓なるべし。

○南面里村

山田の川むかひ西の高き所にある村也。山田の邊よ
り見あぐる所也。田も高地にあり。此村南に向へる
故に名づく。南面里の名めづらし。されども和泉國
大鳥郡牧尾寺の邊にも南面里と云所あり。

○戸板越

南面里村の枝村に戸板と云所あり。本村の上彌高き所にあり。其所に岩戸とて高三間半、根の廣さ面八間二尺ある大岩あり。民俗の説には天照大神岩戸に籠給ひし時の扉の片戸にて、右の片戸は大和國宮戸村片戸明神是なりと云。かやうの俗説は世に多き事なれば、是非を辨するに及はず。奇異なる大岩なれば、いにしへより里民岩戸といひならはせるなるべし。

岩の面は東に向へり。其面に大日の佛像を刻付たり。座像なり。其高五尺一寸あり。此岩戸あるによりて、此下なる郷を岩戸と號すと里民はいへり。されども此村山田村の邊は岩戸とは稱せず。其大石の前に小社あり。里民權現と稱す。左に小き藥師堂あり。後に山祇やまのかみの社あり。此里の産靈なり。此岩のわきより早良郡板屋村へ越る道あり。是を戸板越と云。此道の間大石多くさまざまの、形に似たる岩あり。嶺たうげに杖取と云所あり。これ早良郡那珂郡の境なり。南

面里より此所に上るには、坂の間甚長く山高し。嶺より南の方板屋村に下るには、坂ひくし。是を以て板屋村の地甚高き事をしるべし。

○迹と驚どろきの岡

安德村にあり。今は御所原ごしよらと云。此岡の上に、岩戸少卿原田種直の宅の址あり。種直の五代の祖種資の時よりこゝに住せり。怡土郡高祖城の所に詳也。壽永二年の秋、安德天皇木曾義仲のために蒙塵まうちんし給ひ、平家と共に此國にくだり、しばらく爰に住給ふ。其行宮かりみやの跡此原の内にあり。平家物語に、平家は筑紫に都を定め、内裏作らるべしと、公卿僉議ありしかども、都もいまだ定まらず、主上は其比岩戸の諸郷大藏種直の宿所にぞまし／＼けるとあるは、此所の事なり。岩戸の諸郷とあるはあやまりなり。種直此時太宰府の少貳たり。少貳の異名を少卿と云故に岩戸の少卿と稱せり。又源平盛衰記三十二卷には、平家筑紫に皇居如形作られたりければ、大臣殿およいとつより始て人々安堵し給ひたりけるとあり。則此所なるべし。此原の内に御所の内と云畠の字あり。

一町計あり、その地は脇より少高し。これ安德帝皇居の跡なりと云。近世永祿元龜の比までに、此御所の内の周に築地あり。ついで又其外の宅にも各區に築地おほかりしとかや。然るに土民とも圃はたけの妨なりとて是を崩せり。されども今も猶築地のありしかたち所々に少残りて見ゆ。此岡は村より高さ事八九間許、其上の平なる事恰あだかも碁盤の面のごとし、廣東西百八十六間、南北百五十間許あり。島九町餘あり、四方は山につゝ、かす其外めぐりに田圃あり。山中にかうやうの高き横平の地他所にてはいまだ見ず。此岡の西に堂城寺屋敷とて三反五畝ほどの平原あり。此岡と少し隔ありといへども下はつゞけり。是は原田氏の祈願所なりしといふ。國の東に裂田さくたの溝うなてあり。神功皇后のこゝに來り給ひし時、雷のとゞろきおちて、溝を開きし所の岡なれば、とゞろきの岡と名付けるよし、日本紀神功紀に見えたり。今は里民御所の原といふて、とゞろきの岡といふ事をしらす。又其東南の崖下に小なる岡あり。裂田の溝に近し。是を小岡と號す。

○裂田溝さくたのうなて

安徳村の巽^{たつみ}の方、龍神^{たつがみ}の城下、御所原^{ごしよら}の東の崖下に
あり。日本紀神功皇后紀に曰、皇后神教^{かみのおしへ}の驗ある事
をしらしめして、更に神祇をいのりまつりて、みづ
から西をうち給はんとおぼしめし、爰に神田を定て
佃せらる時に、難河^{なが}の水を引て神田につけんとおぼ
して溝をほらせらる。迹驚岡^{とどろきの}に及で大盤石ふさがり
てとをすことを得ず。皇后武内宿禰をめして、劍鏡^{つるぎかぐみ}
を捧て神祇に祈りて溝を通す事を求む。則時に雷電^{らいでん}
霹靂^{へきれき}して、其磐^{いは}を蹴裂^{けさき}て水を通せしむ。故に時の人
其溝を號て裂田溝^{さくだのうなて}といふと、日本紀に見えたり。轟^{とどろきの}
岡のほとりの溝に、大岩の上を水の通る所あり。是
日本紀にしるせし雷のさきたる所なるべし。其所の
兩方小岩あり。一方は田の中に島のごとくにして、
其形龜に似たり。故に龜島といふ。又其流の下に岩
ある所を掘切たる所百間餘あり。其ほりたる大溝岸
より水面まで所によりて五六間四五間、水の深さ二
尺五寸、あるひは二尺程あり。溝の廣さ下にて一間半

或は二間あり。此溝を堀通したる所、廣く深くして且長く、人力のたやすくおよぶ所にあらず。是皆神功皇后の時はらせ給へる溝なるべし。此溝の水は上なる山田村の一の堰手より來る。其龜島の側に地藏堂あり。是神功皇后を祭れる社にして、地藏と附會せしにや、いぶかし。

○安 德 村

御所原の安徳天皇の行宮かりみやありし岡の下にある村なれば、かく名付けるならし。安徳村の枝村風早といふ所にある井手の廣さ三十七間有。其上の淵を風早淵と云、風早大明神あり。風早の土神也。此風早が手の下兩山有て其

間せばきゆへ、洪水甚しければ、山田の前大水滯て田地をひたす事有。

○山 田 村

迹驚とろきの岡の南半里にあり。迹驚岡より南の山間別に一河内あり。平田なり。是山田村の境内なり。山中山なれども廣くして平かなる事又枰面こはんのの如し。良田なり。凡此村中土地肥壤ひじやうにして、多く菜蔬を作る。又

此村の上、四箇畑に行く道の西なる田の中に細長さ塚あり。むかしいかなる時にや、合戦有し時、骸かはねをうづみし所と云り。

○一の堰手

山田村にあり。是神功皇后のほらせ給ひし、裂田さくたの溝うなての水上なり。此水を引て下なる田地にそゝぎて、神田を作らせ給んため、神後の初てせき給へる堰手なるべし。井手の廣さ八十間有、大井手なり。此郡にかぎらず、此國において、是程の大堰手又別に見えず。此水山田、安徳、東隈、仲付、五郎丸、松木、今光、凡七村の田地百廿九町餘、皆此堰手水を以てうるほせり。

○伏見大明神社

此の社始は肥前の川上大明神をまつる。これ神功皇后の御妹なりと稱す。後に山城國伏見の御香宮こかうのを勸請して合せ祭る。故に伏見大明神といふ。相殿祇園神あり。神體は木像にてふるし。里人の云、むかし

博多焼し時、此所に祇園の神體を持來り置、故に博多の祇園には神體なし。御幣を以て神體とす。城州伏見御香宮は神功皇后なり。伏見にましませば、此神社を伏見大明神と號しけるにや。むかし皇后此邊にて神田をひらき、農民をたすけ、裂田さくたの溝うなてを通じ農民をめぐませ給ひしかば、後人は是を感じて皇后を此所に祭り奉れるならん。

○鰈なまづ淵ぶち

山田村にあり。一の堰手の上なり。此淵なまづに鰈魚多し。常には見ゆる事なし。岩穴の中にありと云。國天下に變ある時は、必あらはれてあつまるといふ。天正十四年七月、薩摩の軍兵此國を亂妨せし前、此淵中に鰈ちやぎすきまもなく泳出ぬ。元和元年大阪陣の時も、また鰈出たる事古のごとし。白鰈及鞍懸鰈くらがけとて鞍置たる形の如く、背の白きなますも此時出たりと云。其鰈の大なる事三四尺に及べり。寛永十四年、肥前有馬に賊兵起りし時も出たり。然れども初兩度の如く

夥しくは出ざりしと云。又慶長五年、長政公此國を領し給ひしより以來、山田村を大身の家臣に宛行れし事共有けり。其地頭逐斥おくせきせらるべき前兆ぜんてうにも鯪出けりと云。此所の鯪一の井手より上なるをば神の使と里民おそれて取らず、此井手より下に落下れば神のめぐみに背けりとして常の魚の如くとりて食ふとなり。

○馬むまの瀬

山田村の西なる川に馬瀬といふ所あり。鯪淵の上なり。里民傳へて云、辨財天百濟國より來給ふ時、龍馬に乗、此瀬を越給ふ。故に馬の瀬といふ。此說誠に野人の語なり。其非を辨するに足らず。今おもひ見るに、神功皇后三韓より歸らせ給ひ、背振山に上り給ひし時、此瀬を馬にて渡らせ給ふ。故にかくの如く云傳へしにや。天竺の辨財天は女神なり。皇后新羅より歸らせ給へば、かくいひ轉てんせるならん。

○梶原村

上下兩村にわかる。上下の間近し。四方に山あり。谷の中にある里なり。境内長さ二里許有。民俗云傳ふるは、梶原景時が末葉、此所に住ける故に村の名とす。大なる宅の址あり。是を平三屋敷と云。是景時が末裔の居たりし居宅なりと云。梶原平三と云者は、慶長の比居たりしといふ。

○四 箇 畑

岩戸河内のおく山中にあり。是又一河内にあり。不^ふ入道^{にふだう}、埋鐘^{いも}、鳴瀧^{いちの}、一瀬、此四村いにしへは一村にて南畑と云。今四村と成り、各其名をとなふといへども、今もすべて四箇畑といふ所、此おく山を越て五箇山也。四箇畑五箇山對せる名なり。

○不 入 道

むかし背振山盛なりし時は、守護不人の地なりと云、此所より上すべて守護不入なりし故に、名付しならん。又此村の境内に瀧あり。水流五間ばかりあり。いとめづらしき好觀なり。其側に小き觀音堂あり。

山田と不入道との間、東の山のかたはらに大なる石たてり。

○埋鐘

此村の中にたゝらと云所あり。むかし此地にて鐘を鑄けるに、災難有し故、其鐘を地に埋めける。是によりて所の名を埋鐘と號す。又むかし亂世の時、盜賊のかすめ取るうれへ有し故に、鐘をうづめし所もありしとかや。

○鳴瀧

此村に瀧ある故に鳴瀧と云、後に誤て成竹と書り。村上に高山有、かゝめき山と云。枝村に寺倉と云所あり、是はむかし背振山寺僧の藏ありし所なりと云。今は畠となれり。又此村及南面里村の山に石南花多し。春は花開て、錦をさらせるが如し。

○一瀬村

那珂川の上流にて、是より五箇山へ越所、川瀬ある故に、一瀬といふにや。村は高き所にあり。後は山、

前は川、向にも山ありて、佳景也。しかれども谷水の音常にかまびすし。又此所に一嶽といふ古城あり。古戦場の部に詳也。

一、如水公の弟黒田養心此村に卜居せらる。其宅の跡猶殘れり。歿後此地に葬る。河西の高き所に墓あり。一、此村より五箇山の内網取村にゆく本道は、龜尾嶺をこえゆく。又山をこえずして川にさかのぼりゆけば、西不動石とてあり。其岩の高さ十一二間もあるべし、奇石なり。此所をからたきといふ。是より四十間許川上に瀧あり。高さ四間餘、水のながれ常に絶えず、沫の散する事雪のふるがごとし。鮎返りといふ。其邊に大石多く見所あり。此所にも小瀧四流あり、水多き時は一流と成てながる。是より三町許ゆけば東不動石に至る。兩岩ありて一所にならべり。東の岩の高さ十五六間許、西の岩の高さ九間許あり。東の岩に梵字を刻めり。其岩のよそほひ削なせるがごとく、天工誠に奇絶なり。又是より二町許ゆけば、

泉水と云所あり。池あり。其形瓢ひさこに似たり。横二間長五間あり。是より谷にしたがひ行て網取村に至る。凡一瀬村より川をのぼりて網取村に至るまでの峽中、山水の奇石、崖岩の景色すぐれたり。然れども危嶮きけんにして、經過けいくわころにまかせざるを恨とするのみ。王龜齡が詩に、山川好處造化惜。不レ許サ世人平地看ニルヲ。と作りしも、げにさる事ぞかし。

○五箇山

岩戸の川上、深山の内に五村あり。故に五箇山と云。網取、道枝折みちしをり、桑野、河内、大野、小河内、是なり。一瀬より龜尾嶺かめのたうげと云山を南に越れば、則五箇山の郷内なり。此河筋にて岩戸を一河内とし、山田を一河内とし、四箇畑を一河内とし、又五箇山を一河内とす。同流の上下に四の河内あり。道枝折は道より東にあり。川向なり。東の山を後にしたる里也。今誤て道十里と云。網取は川の西路の傍にあり。此地に櫻多し。網取村の境内に、虎が岳とて古城の址あり。

城主しれず。龜尾山につゞきて少東南の方にあり。
桑野河内は網取より川上にあり。河東なり。民屋十
二三軒有。此邊より上は谷せばし。網取より上十八
九町ばかりに谷二あり。直に行て白土が城と云小山
を越、流にさかのぼりて南に七八町ゆけば、大野と
云村あり。直に南にゆかすして右に轉^{てん}じて、西北よ
り來る流にさかのぼりて行。肥前國の内を六七町通
り過て、又當國に入、東小河内村に至る。大野と東
小河内は谷かはれり。大野には民屋七八軒有、櫻有、
五箇山の内なり。川のむかひ同谷の内に、肥前神崎
郡西小河内の枝村あり、民屋二三軒有。大野村二三
町前より左に行ば嶺あり。肥前國阿屋部村へ越る道
なり。此所に境塚あり。筑前肥前の境なり。大野よ
り南の方肥前の内を四五町通り、川を越、又筑前に
入、十町餘行て嶺あり。地燒嶺^{ちやけたうげ}といふ。谷川のなが
れ出る頭を境とす。地燒の前の嶺^{たうげ}を小嶺と云。道祖^{さへの}
神兩所にあり。又烏帽子岩といふ岩あり。地燒嶺^{ちやけ}よ

り肥前の方に四町許ゆけば、彼國よりたてし關所あり。東小河内村は網取より廿五町あり。東小河内の少下に兒おとしとて深き淵あり。淵の上に二間ばかりなる瀧あり。むかし此邊の山寺の兒瘡おこりをわづらひけるに、驚かしておどさんとして、此淵の上なる大なる椎木しんぎに兒をのぼせ、繩にてからげ付けるに、取落して彼兒水に溺て死せり、故に兒落しと云。東小河内の川向ひにある村を西小河内と云、是は肥前の内なり。民家あり。東西一村なるべきに村を異にするのみならず、國を異にせり。其間纔に一の小川をへだつ。大野は肥前の内なるべくして筑前なり。西小河内は筑前の内なるべくして肥前なり。凡國郡を分つに高山大川を以て境としたるは、境地へだゝれる故、土地の風景も同じからず、人民の風俗もかはる事さも有べし。又山の嶺を以てわかたずして、小なる河渠みぞをへだて、或は小なる道を以てかぎりとする所も有。同じく一谷の中にありといへども、國を異に

する事諸國に多し。東小河内と西小河内は、まことに
わづかなる川を一へだて、男女朝夕往來すれば、
風土も異ならずして、民俗も同じかるべきに、國の
風化によれるにや、言語民俗もかはれりと云。東小
河内に山神の社あり。杉あり。大にしてうるはし。
山に櫻多し。花盛には見るにたへたり。山ふかき故
に、世間の花にくらぶれば、おそき事十四五日許な
り。此地の山櫻年の寒温にて少し遅速あれども、大
やうは穀雨^{三月}中前三三日盛なり。むかひの西小河内
の山にも櫻多く、緑樹しげし。此谷中春は花、夏は
緑、秋は紅葉、冬は雪、四時のながめつきず。面白
き境地なり。五箇山は山中境内せばく、田圃すくな
けれども、人民多し。茶を多く植て家産とす。五箇
山茶とて是を用ゆ。此山川に二三月は榎のはといふ
魚ありてとる。鱒に似て小なり。

○九千部山

此山、肥前筑後の方より見れば、甚廣大にして高し。

筑前より見るに異なり。基肆養父^{テヨ}兩郡に近くのをめり。村民の説に、むかし性空上人法華經を一萬部讀誦せんところざし、九千部よみ、其しるしに此山に塔を建てたる故に名付。今此山上に其しるしの三重の石塔あり、高さ二尺許、其下に風穴とて穴あり。殘千部は筑後久留米の町内經の隈と云所にてよみ終て、彼地に經を埋めりと云。九千部山の麓に谷川有。一瀬の上に流れ出る。一瀬の上より五箇山の方へゆかずして左方にゆき、谷川をつたひ上りゆけば、九千部山の北のふもとに至る。其間に近年民家少し出來たり。大谷黒木など云所あり。寺社などはなし。九千部山、峻にして材木多し。むかしは網をはりて鷹を取しなり。是より肥前田代に越る道あり。其嶺に筑前肥前の境あり、嶺を越て南に肥前本城河内と云所有。

○西畑村

此村は、早良郡小笠木村と當郡別所村との間の山中

にあり。他の村里を遠くはなれたる村にして、其めぐりは皆山かさなれり。小笠木村にも越ゆく。其谷水は東に流れて別所村に出る。此村より別所まで十餘町あり。其間は山あひの谷なり、清流激湍多ししておもしろき佳景なり。就中鱗回とて高二間許の瀧あり。觀賞するに堪たり。下は小なる淵なり。村中に古寺の跡二所あり。比丘尼谷とて尼寺の跡もあり。今は一寺もなし。産靈は山祇なり。十一月初丑に祭禮あり。此神蘆毛の馬を嫌ひ給ふとて、村中に是を飼はず。此神のみならず蘆毛の馬を嫌ひ給ふと云傳へたる神、嘉摩郡馬見權現もしかりといふ。又他國にもあり。攝津國有馬湯山、信濃國望月の里など同じ。

○彌長村

其産靈の神は背振の神のよし、社人稱す。此村民古より彦山に參詣せず。彦山の山伏を村中に入ず。又村中に、古來今に至るまで、彦といふ字を村民の名とせず、其故は未詳。

席田郡

此郡は、御笠郡那珂郡と糟屋郡との間にはさまり、國中にて最小なる郡なり。只八村あり。八村皆東の山の麓に在りて南北につらなれり。延喜式二十二卷曰凡郡不得過千戸。若餘五十戸以上者。分隸此郡。地勢不宜分者。隨狀立別郡。其不滿百戸者。隸入他郡。若不得已而應分者。別錄申官。篤信ひそかに謂、席田郡は甚小にして、那珂糟屋御笠につけり。地勢を見れば分つべき所にあらず。されども右三郡何れも大なり。もし其上に又席田郡にある所の戸數を加へば、千戸に過なん事をおそれて、戸數すくなけれども、別に此郡をわかつたるならん。其故に此郡は甚小なるべし。古今著聞集曰、經信卿、大宰帥に任じて下向の時、八月十五日夜筑前國席田驛につきたりけるに、天晴月あきらかなるに、館の前に大なる槻ありけり。枝葉ひろくさしおほひて、月をへだてければ、人をめしあつめて、たちまちに

其木をきりはらはせて、月に向ひて夜もすがら琵琶をかきならして心をすまし、天明ぬればたゞれけり。かゝるすき人も今はなき世なりけり。篤信曰、席田のむまや、いにしへ此郡の内いづちにありしにや、今は其所しれず。若今月隈といふ所、彼經信卿の月を見られし所なるか、大なる槻木つきのありしよし、著聞にしるし侍れば、槻隈とかけりしを、後にあやまりて月隈と書くにや。月隈は此郡の東山下にあり。此所むかしの道ありて、宿驛ありしにや。

和名抄に載る所の郷の名三あり。

石田いしだ 大國おほくに 新居にひまなり、今は其名一も傳らず。

今稱する所の村の名

金隈村かねのくま

立花寺村りうげし

上月隈村

下月隈村

見上村けんじやう 下月隈村の内

古森村同上

平尾村

雀居村ささめ 平尾村に屬す

青木村

薦田村青木村の内

上舊井村

下舊井村

田屋村下舊井村の内

以上 十三村

内 八 本村
五 枝村

○金 隈

御笠郡と席田郡との境は、御笠の中村と金隈との間にあり。村の南に尾崎とて、高き山より出たる山の尾あり。其上に穴塚多し。其南の谷の奥にも、穴塚甚多し。南の山上にもあり。是皆上古の穴處せし舊址ならん。近年石を掘てとりし故、窟多からず。又金隈の高き山上に石鏡あり。側より見れば能く物のかげを移す。向ひてみればうつらず。其面平かにして光あり。其石の高三尺餘、横一間許あり。是は火打石の類なり。其邊に燧石^{ひうちいし}多し。か様の石鏡上座郡菱野村^{ひし}にもあり。此石の事、菱野村の處に詳にしるす。山城國鷹峯^{たか}の下にも、鏡石とてかやうなる石あり。